

第十章 無冠

平成十九年度の三年生

浜本（熊本）磯野（純心）橋本（小島マネ）影井（鳥取）川瀬（郡）

一 レイノー

平成十八年一〇月 県下総合選手権 三位 スタメン 磯野 川瀬 上田 松本 松木

【案内文書】

県総合選手権に出場する時は三年生も含めた選手で臨みますが、今年はウィンターカップ予選で負けたので新チームで戦います。このところずっとAチーム⇨前川・大宍・高崎・野村・磯野とBチーム⇨松本・松木・森・山口・川口でスクリメージをやってきましたが、BチームはAチームにまったく歯が立ちません。

Aチームの構成はウィンターカップ予選に備えてのチームですから磯野は下級生ながらAチームに入ります。ですから、Bチームは純粋な新チームではありませんが、それを差し引いてももう少し食らいつかなければなりません。特にひどいのはディフェンスです。これは足を鍛えたり、ディフェンスのドリルをたくさんやれば解決する問題ではありません。日常生活の中の「見る」「聞く」から情報をたくさん引き出せる選手に育てなければなりません。新チームの選手たちにはその問題解決に時間がかかりそうな選手が目立ちます。

これらの問題を抱えながらこの大会に臨みます。本当は、上級生に鍛えて貰いながら地区新人戦で新チームとしての初舞台を踏むところですが、ウィンターカップ予選に負けたのでそれが一ヶ月早くなりました。それも、いきなりおとな相手の試合です。どういう展開になるか私にもわかりません。

なお、ウィンターカップ予選終了後三年生はバックアップに回り、下級生が主役のチームになったのでタツフも替わりました。新キャプテンは浜本、チーフマネージャーが橋本になります。

【結果報告】浜本（膝手術後リハビリ中）影井（アキレス腱リハビリ延長）

初日

案内文書には、磯野・松本・松木・森・山口のスタメンで臨むだろうと書きましたが、本番では森と山口に替えて川瀬と上田を起用しました。来年の高校総体のスタメンは浜本・磯野・影井・松本・松木になるとは思いますが、もっとも背が高い影井はセンターではなくフォワードです。センターは一七二cmの磯野。この程度のサイズのチームで普通のバスケットをしていては全国大会なんて目指せません。小さいのだから強烈なディフェンスができるチームを作らなければなりません。

ディフェンスはバスケットキャリアではなく人間としてのキャリアの差が出ます。すると、一年生が四人もコートに居てはダメなんです。

そこで、一旦戦力としてのラインから外れた川瀬と上田が呼び戻されたわけです。このメンバーで本格的にスタートしたのが一〇月七日に実施した長崎大学との練習試合でした。今日が二回目の他流試合です。そして、今日のふたつの試合でチームはがらりと変わりました。

二つめの相手のクレインズは鶴鳴OGのチームです。「クレインズはうまいわ。こりゃ負けても仕方がないな」と思っていました。でも、新チームは踏ん張りました。八八対七九で勝ち、新チーム初の公式戦としてはハナマルをあげます。なお、前述の五人以外は一秒も出場させていませんが、こしばらくは他の選手にサービスタ임을設けてやれませんか。この五人に少しでも経験を積ませなければならぬからです。

最終日（初日の一週間後）

昨日と一昨日神村学園とスクリメージ（二〇分×八本）をしました。それをこの五人だけでやり通しまし

た。一昨日は「やっぱり強くなっている」と思いましたが、昨日はドヨンと身体が重くなり、並のチームに戻ってしまいました。交替なしで四ゲーム戦ったので疲れが残っていたのでしよう。わかっていたことではありますが、そんな状態で王者ストレッチ(成年女子国体チームの母体チーム)に挑戦するのは無謀です。準決勝で九三対三九で負けました。

【戦評】

ストレッチは気合い充分。鶴鳴は先週とはうってかわって表情も動きも重い。ストレッチがもたもたして高校生が元気一杯ならまだしも、逆にストレッチが元気一杯で高校生の動きが重くては試合にならない。鶴鳴はこの大会に賭けているのではなく、新チームに経験を積ませるのが目的だというのはわかるし、主砲の浜本が出場していないというのを差し引いたとしても、これでは先の展望が開けない。 文責 山崎 純男

平成十八年一〇月 地区新人戦 四位 スタメン 磯野 川瀬 上田 松本 松木

【案内文書】

先週からディフェンス強化だけを目的とした練習を取り入れています。一〇年振り?いやもつとでしょうか。私は「ディフェンス力強化にもつとも重要な要素はイメージ能力である。脚力ではない」と思っています。それは今も昔も変わりません。ですから私は、ディフェンス強化についてはオフェンスの動きを作ったり確認したりする時のダミー役を真剣に正確にやらせることをとても大切にしてきました。あとは、スクリーミーヤその他の攻防の練習の中でディフェンスは自然に強くなると思ってやってきました。

しかし、最近それではディフェンスの強いチームは作れなくなってきたのです。最初はジャトウがいるから仕方ないかなと思っていきましたが、ジャトウがいなくなってもそれは変わりません。それで、ディフェンス強化だけを目的とした練習を取り入れることにしたわけです。

私のディフェンス強化は密着ディフェンスやボディチェックなど、激しいボディコンタクトを選手に要求しません。あくまで「問を読む」が基本です。そのために今回特別メニューを考案しわけではありません。これまでの練習メニューの中のディフェンスの頑張りが出てくるメニューを復活させただけです。

でも、ディフェンスフットワークは皆無です。そのような単純な動作や激しい動きの繰り返しではなく、時間と場面を常に頭の中に置き、その攻防の中でディフェンスの読む能力の向上を目指します。

これをやり始めたばかりで先々週と先週にまたがった県総合選手権に出場し、その間に一泊二日の招待合宿で神村学園とスクリーメージを計四回以上やりました。その結果、「ヨシ、これならいけるぞ」という試合もありましたし、間を読む力が中途半端なために頑張りが徒労に終わり、失速した試合もあります。

というわけで、試合を観に来られた方々に「ははーん、こういうふうになりたいわけか」ということがわかってもらえる試合を、選手たちがコートで展開できるなら今後の見通しは明るくなるでしょう。わかってもらえることは動きだけではありません。選手の心の内も含めてです。

【結果報告】 浜本(膝手術後リハビリ中) 磯野(長崎西戦で膝負傷) 影井(アキレス腱リハビリ延長)

試合当日インターネットに繋いだパソコン処理ができる場合は、その日の結果をホームページに載せますからこのように日毎の結果報告になります。

初日

一〇月八日(日)の県総合選手権と同十三日(金)の強化合宿での神村学園とのスクリーメージ初戦。このふたつはすばらしい内容でした。それが再現できません。十五日の県総合選手権決勝戦は前日と前々日二日間の強化合宿の疲れでまったく精彩がなく、ポコポコにやられました。今日の試合もこの一週間の疲れを引きずっており、重たい試合でした。でも交替させずにこの五人だけでやるのは、まず主力になるこの五人に、試合における様々な局面を体験させ、舞い上がらない、落ち込まない、うるたえない力を身につけさせなければなりません。

体力がないから四〇分続かないのでもなく、バスケット理解力がないからうまくいかないのでもありません。

ん。これまでの人生の中で危機を乗り切った経験が少ないから力が定着しないのです。

最終日

二週間前に私からハナマルを貰った鶴はどこかへ飛んで行ってしまいました。あのハナマルはまぐれでもたまたまでもありません。訓練で勝ち得たものです。しかし、それを維持できないというのもまた彼女たちの現状を表しています。自分を叱咤し、自分を激励する。これを何度も何度も積み重ね、「たくましくなつたねと言われる試合をしたい」と思つてコートに立つ。それが最良の治療方法でしょう。

備考

磯野のケガは、リバウンド争い中のジャンプ着地の際、右膝が過伸展状態で、ぶつかった相手のしかかつて負傷したものです。(翌日MRI検査の結果ACLは損傷していないが脛骨の骨挫傷をわかつた)

【戦評】

長崎西戦

第一ピリオド長崎西は堅い。一方鶴鳴は昨日とはまったく違つてよく動く。しかし第一ピリオド終わり頃から鶴鳴はガタツとパフォーマンスが低下する。焦りなのか不安なのか、ナイスになるはずのプレイがミスで終わる。それを挽回しようとはがんばるがそれが徒労におわる。そんな経過をたどり、ずるずると後退していった。

長崎西は第二ピリオドから落ち着きを取り戻し、笹嶋の切れの良いドライブと、センター西島の制空権支配で勝利をものにした。

純心戦

新チームになつての初戦らしく双方幼いプレイが目立つ。鶴鳴は特に元気がない。ケガで磯野を欠いているからだろう。後半残り五分。小差ながらずつとリードされ続けていた鶴鳴は七三対七三と追いついたが、鶴鳴の選手たちに「さあ追いついたぞ」という雰囲気がない。心身共にリフレッシュして県新人戦に臨んで欲しい。

文責 山崎 純男

【福岡遠征】於 九州女子高校

十一月〇五日 日帰り 対戦チーム 九州女子高校

スクリメージ 五本 ○勝五敗

後日談

このところ九州上位の常連になつている九州女子には歯が立たないとわかっているし、それになお浜本、磯野、影井を欠いているのに練習試合をお願いした。残りのメンバーで練習しても志気があがらないからである。当然赤子の手を捻るように簡単に処理された。

私は選手たちに「遠征の車中で眠るのはかまわないよ」と常々言っている。運転している者は眠くならないが乗り物に長く揺られている乗客は誰もが眠くなると知っているからだ。だからマイクロバスの中にビデオデッキやテレビを私は取り付けない。助手席に乗ったマネージャーは出発してからしばらく私の周辺の世話をするが、それも必要なくなると「寝ていいよ」と言つて眠らせる。

マイクロバスの室内リヤミラーで選手の様子は見える。ほとんどの選手が眠っている。中には椅子からずり落ちるのではないかと思われるほど傾いて眠っている選手もいる。帰りの車中はそんな状態である。みんな疲れているのだ。

平成十八年十一月 県新人戦 一回戦敗退(対西海) スタメン 川瀬 上田 松本 山口 川口

【案内文書】

短大の幼児教育学科に社会人入学で入ってきた学生がいます。離島出身です。幼稚園に勤めていたけど幼稚園教諭や保育士免許を持っていないために、どんなに一生懸命やってもまかせて貰える仕事は限られる。

それが悔しいので免許を取りたいと思つて本学を受験したのだそうです。一旦社会人として仕事に携わった人間ですから、物の見方や考え方が他の学生と違います。でも、あんまりがんばり過ぎて夏休み前に自律神経のバランスを崩してしまいました。

夏休みを挟んで何とか体調を戻し、後期はまた元気に学校にきています。その学生の治療のことや学業のことでも母親と電話で話をしました。

母親は鶴鳴のバレーボール部員だったそうで、卒業後もママさんバレーですつとバレーボールには関わっていたそうです。電話で話す口調も若々しく元気いっぱいという感じでした。

「先生、私も定期的に長崎に行きますから一度お会いしたいですね」

「え、そうですね。バレー関係で？それとも仕事で？」

「いいえ、私肺ガンなんですよ。大学病身で定期的に治療を続けているんです」

「…」

そんな話をいとも簡単に、世間話みたいに話す神経の持ち主ってどんな人だろうと思いましたが、あとで他の人からたまたまこの母親の話を聞きました。

「ああ、あのですね。元気なんですよ。一時期治療のために髪がすっかり抜け落ちてしまったことがあるんですけどね、まったく落ち込んでいないでしょ、あのお母さん」

話をバスケットに戻します。案内文書のエントリー選手の備考欄にはリハビリという文字が試合毎に増えていきます。でも、バスケットボールは五人居れば試合ができるんです。案内文書のエントリー表にはリハビリという但し書きのついた選手を除けばまだ十一人もいます。嘆いてばかりいては一步も前に進まない。丁度よい時期にこの親子から勇気を与えてもらったと思つています。

【結果報告】

浜本 (ACL術後リハビリ中) 磯野 (骨挫傷治療リハビリ中) 影井 (アキレス腱リハビリ中)

上田 (大会直前虫垂炎) 松木 (試合当日四〇度発熱) 吉谷 (ACLリハビリ中)

県大会の初戦で負けたのは昭和六一年六月の県高校総体で負けて以来二〇年ぶり二回目です。浜本・磯野・影井のケガについてはこれまでその経緯を逐一報告してきましたので繰り返しません。磯野が一〇月の地区新人戦でケガをしてから県新人戦に向けて立て直しを図りました。川口 (一七五cm岩屋中) を使わざるを得ないので、彼女を使った時は一―三のゾーンディフェンスを布くということでその練習に約一ヶ月費やしました。

しかし、県新人戦が近付くにつれてそれでは心許ないので、小さい選手ばかりになってもいいからマンツーマンディフェンスでがんばって走るといふ布陣も用意しました。でも神様は私にまだ試練を与えます。十五日(県新人戦三日前)に腹痛で上田が早退。その日虫垂炎疑いで緊急入院。抗生物質点滴でCRP値はとりあえず下がったので翌十六日夕方に退院して十七日には登校。しかし十七日の練習には参加させずにぶつづけ本番で試合に出しました。

ところが上田が登校した十七日に今度は松木 が発熱で早退。その日四〇度まで上がった熱が翌日の朝も引かないので佐世保には連れて行きませんでした。コマがいまません。でもコマがいらないから仕方がないではなく、なぜこも主力選手から順にコマがいなくなっていくのかを考えなければなりません。選手の自己管理を問題にするだけでなく、私自身のことや選手を取り巻く環境のことも含めて…

理由の一つとして、私が県協合理事長職と短大の研究論文で忙しすぎるからだ指摘する人がいるかもしれませんがそれはありません。もしそれがチーム指導に影響すると思えば自ら理事長職を辞し、研究も学生の研究指導のみで済ませます。何が起きても私の最優先事項は強いチームを創ることです。

【戦評】

矢尽き刀折れ、という表現がピッタリの試合だった。人生いろいろなので負けたり失敗することがあるのは仕方がない。しかし、長崎県バスケット界の牽引者を自負しているならば、負けても王者の風格が漂って

いなければならぬ。漂っていなかったぞ。

文責 山崎 純男

【招待合宿】於 鶴鳴

○一月〇三日～〇六日 対戦チーム 慶誠高校・佐賀清和・慶進高校・九州女子・徳島城北

札幌創成・神村学園・清峰高校

試合数 二四本(二〇分二三本と一〇分一本) 勝 敗

出場時間 浜本〇・磯野三二八分・影井二二四分・川瀬六九分

上田二二九分・長松〇分・上村〇分・松本四〇〇分

松本四二一分・川畑四二二分・吉谷八分

川口二八四分・森四六分・山口一〇九分・木村〇分

コメント

公式試合ではありませんから勝ち負けが必ずしも双方のチーム力を表しているとは限りません。影井が終盤足首を傷めてベンチに下がりましたが、川口と川畑がスタメンにのし上がってきたのは大きな収穫です。浜本は三月下旬にスクリメージ参加の予定でリハビリを続けていますが、私は五月の連休デビューだと思っています。

【定例行事中止】

二月十一日のブログより

平成十八年度の「ベンツに負けない純国産の軽四輪作り」は失敗に終わりました。部分改良では間に合わず、解体作業と組み立て直しに追われた一年でした。ですから正月合宿は中止する予定でした。しかし、常連の方々の絶つての頼みを断りきれずに実施しました。この合宿では鶴鳴の成果もそこそこでした。しかし「このままではダメ」という状況は変わりません。したがって、ここ当分はチームの解体作業と組み立て直しに時間がかかり、とても他のことには手が回りません。そういう状況なので、毎年行っている事業を次のとおり変更したいと思います。

三月下旬の関東遠征は今年度だけ中止

四月上旬の四国遠征は今年度だけ中止

四月上旬の鶴鳴杯中学生招待試合は今年度だけ中止

五月上旬の倉敷遠征は実施か中止か不明(浜本の復帰状況次第)

年に二回実施している医科学測定は当分の間中止

今年度は三年に一回のアメリ力遠征実施の年だが今回は中止

二月二〇日のブログより

十七日の九州理事総会では「先生、もうチーム見てないんだって?」と、ある県の理事長から言われるし、今日は「来年鶴鳴に行きたいと思っているA地区のB中学校のC選手が、今年は遠征も何もしないってホームページに書いてあったので心配だと言ってたらしいですよ」と教えてくれた人がいました。

本当に強いチームを創りたいから今年の春は練習オンリーに切り替えただし、まだまだやるつもりだから一昨年新車のマイクロバスを買ったんですけどね。噂や憶測はこうして一人歩きます。ま、結果を出せば全てが解決しますけど…。

【レイノー】

二月二〇日 夕方、選手と一緒にグラウンドを走って体育館に降りてきたら突然左手の人差し指が丸ごと一本真っ白になった(レイノー現象)。すぐお湯につけたら三分ぐらいで症状は消えた。

二月二一日 また同じ事が起きた。その夜バスケットボール協会の会議で朝長会長(医学部原研内科教授)

にこのことを伝えると黒岩医院を紹介してくれた。

二月二日 黒岩医院受診。血圧一六二ノ一一〇。高いので驚いた。エパデルとアテレックを服用し、一週間経過を見ることにした。採血をした。朝と夜の血圧を毎日測るよう指示された。レイノー現象は膠原病のひとつの症状としても出るし、レイノーだけが出来るレイノー病（昔は振動病と言った）もある。いずれにしても末梢動脈の血行障害で起る現象である。寒冷に晒されると症状が出る頻度が高まる。

三月〇二日 二回目の受診。採血結果を聞いた。CRP(定量)は〇・一だった。しかしRAは±だった。慢性関節リウマチの疑いあり。同じ薬を二週間分貰った。

三月一〇日 足にも冷感を感じ、シャワーを浴びたあとなど部分的に白い部分があるのに気付く。それもずっとではなく、しばらくすると消失する。手には初回のようなレイノー症状は出ないが、冷感があり、血行が悪いという感じがする。次の受診日に報告することにして様子を見る。

三月十五日 三回目の受診。前述の症状を伝える。薬にはデイオバンが追加される。

三月二二日 四回目の受診(血液検査の結果を聞くだけ)。RAHA^{II}一六〇。前回の検査ではRA^{II}±で、慢性関節リウマチによるレイノー症状の疑いだったが、今回の検査結果で「疑い」ではなく、「確定」となった。さらに、抗CCP抗体の検査(保険適用外なので自費となるが)を依頼したがその結果は週明けにわかる。たぶん、油屋町の後藤会病院へ転院となるだろう。

三月二三日 五回目の受診。抗CCP抗体の検査結果を聞きに行ったがまだ結果が出ていなかった。朝長教授の「必要とあれば大病院の江口教授に診て貰うということも可能ですよ」というメールを伝える。黒岩先生もそれに賛成し、江口教授の診察日を調べてくれた。抗CCP抗体の検査結果などのデータを揃えて四月十三日か二〇日に診て貰うよう手配することだった。

四月二〇日 大病院で江口教授(日本のリウマチの権威)に診て貰った。忙しそうなんだ。黒岩医院で採取した血液の検査結果とその他の諸検査の結果を聞いた。最初に症状が出てから二ヶ月半。ようやく診断が下された。

慢性関節リウマチではない。強いて言えばシェーグレン症候群かもしれないがそれとて白に近いグレイだからこのまま普通に生活していてよいし、クスリも飲まなくてよいという結果だった。ではなぜレイノー症状が出るのか?その原因は何なのか?ということになるが、バイクの運転時間が長すぎた(振動)のかもしれないし、交感神経と副交感神経のバランスが悪いのかもしれないし、いろいろな原因が考えられる。が、それを突きとめるために費やす時間もつたいないので検査はここで打ち切る。そして、バスケットと研究とランニングに費やす時間を大切にしようと思う。手足を冷やさないように気を付けておけば症状は出ないのだから。

一年後 四月二〇のブログより 一年経つが最初の時のような指一本真っ白で死人の色になるようなレイノー症状は出ない。しかし、冬はいつも手足は冷たく、急に冷えると手足は部分的に白くなる。

二 復活

【鎖骨折】

三月十四日、スクリメージ中に松木が鎖骨を骨折した。松木がシュートを外し、相手がデیفエンスリバウンドを取ってドリブルで速攻を出そうとする瞬間の出来事だった。デیفエンスに戻りかけた松木は相手が前を確認せず、振り向きざまにドリブルしようとするのを見てチャージングを取ろうとしてボディチェックに入った。その時相手の肩と松木の胸がガツンと当たった。

この一部始終を見ていた私は「やった!」と思った。痛そうに姿勢を丸めている松木を呼び、まっすぐ立

って見る」と言った。姿勢が傾いているし、Tシャツの上からも右鎖骨部がくの字に変形しているのがわかる。私は「鎖骨が折れている。すぐ病院に行け」と言い、三角巾で腕を吊ってマネージャーを付き添わせ、思案橋の榎林整形外科医院に行かせた。もちろん病院には事前に状況説明の電話をした。

しばらくして松木は病院でギプス固定して貰って戻ってきた。鎖骨骨折は足や手の骨折と違い、息をするために肺を動かすのでガツチガチの固定はできない。鎖骨骨折は治療のあとが苦しい。夜寝返りを打つのは痛くてできない。しばらく松木はその苦しみと闘わなければならぬ。松木はその日から六ヶ月のブランクを経て九月のウィンターカップ予選からようやく復帰した。長かった。

この年度の主力選手のことについて少し話そう。

三年生のメガトン級の主砲浜本（熊本出身）は昨年六月にACLを損傷し、八ヶ月の間八ビリ中。

三年生の自主志願の影井（鳥取出身一七七cm）はアキレス腱を傷めてほとんど使えない。

三年生の自主志願の磯野（純心中出身）はちゃんと仕事をして貰っている。

二年生の松本（佐世保出身）もちゃんと働いて貰っている。

二年生の松木（長崎市出身）は前述のとおりしばらく戦線離脱。

二年生の川口（長崎市出身一七七cm）は課題が多く、なかなか公式戦で使えるようにならない。

平成一九年度のチームは、健康であれば浜本・影井・磯野・松本・松木のスタメンで、川口と山口（諫早出身二年）をバックアップに育ててかなりのところまで行けるチームになるつもりだったのが、昨年の浜本のACL損傷を皮切りに片肺飛行で長期間飛ばなければならなくなった。踏んだり蹴ったりである。

【ボロボロ】

四月一〇日のブログより

川畑が朝練の時「アノー、右足の甲が痛いのですが診ていただけませんか」と申し出てきました。診なくともその申告内容だけでわかります。中足骨の疲労骨折です。今日からしばらくの間痛みを感じる動作は禁止です。新入生も戦力にカウントできるのは約三人ほどで、それも春季戦の三回戦ぐらいまでしか使えない戦力ですから、川畑の休養でますます苦しくなってきました。

しかしよい兆候もあります。春休みになってから軽いチーム練習に参加していた浜本は、少し動きが激しくなると水が溜まり、水が溜まったら土曜日に抜いてヒアルロン酸を注射するという治療を繰り返してきましたが、三月二四日（土）以降水がたまらなくなり、五対五の攻防に参加するようになりました。そして三月二八日（水）からはとランジション一往復半の攻防に入るようになり、四月一日（日）からはスクリメージに入るようになりました。

それ以来用心しながら短時間だけスクリメージに参加させていますが、四月六日（金）に「ん？お前ひよつとしたら春季戦に出るつもりじゃないのか？」と聞いたら浜本は小さくコックリしました。「ひよつとしたらやれるかもしれない」と思っていたんですよ浜本は、やっぱり。私は「バーカやめろ。焦ることはない。照準はあくまで高校総体だよ」と言いました。ホツとしている反面「また溜まりはじめたらどうしよう」と毎日ビクビクしています。

四月十一日のブログより

放課後、川口と川畑がこそこそ話し合っています。そして川口が私の方に向かってきます。私「お前もリタと同じ症状なんだろ？」川口「ハイ」私「わかったわかった、しばらく療養だ」これでまた一人減りました。

四月十九日のブログより

本日午後四時半頃。三対二の練習中に磯野がリバウンド争いで他の選手の足に乗り、左足首をゴキッと捻挫しました。どこまで続くぬかるみぞ…ってか。なーになに、来るならなんでも来い。こうなりやもう開き直りだ。

平成十九年〇四月 県下春季選手権 四位 スタメン 磯野 川瀬 松本 川畑 森

【案内文書】

佐世保市開催ですが、昨年同様経費節減のため日帰りします。泊まりません。

浜本は昨年のこの大会では主砲として大活躍してくれましたが、二ヶ月後の高校総体でACLを損傷し、七月に手術をしました。今はACLは完璧に繋がっているし、筋力も左右差がなくなりましたが、動きが激しくなると水が溜まるので今回まで無理をさせません。

浜本がケガをした頃影井もアキレス腱を傷めて静養中でしたが今も一進一退の繰り返しです。一〇月の地区新人戦では磯野が膝を傷めてさらに一人戦力が減りました。十一月の県新人戦では上田が虫垂炎疑いで抗生物質を投与しながらの出場だったのでさらに戦力ダウン。それに追い打ちをかけて大会前日には松木が突然四〇度の発熱で欠場し、コート上の主力選手は松本しかいなくなりました。そして結果はご存知のよう一回戦敗退でした。

あれから五ヶ月、磯野はテーピングをして練習には参加できるようになりましたが、松本は三月十四日に鎖骨を骨折して今回は出られません。上田もあれからずっと体調不良が続いていて学校を休みがち。影井は折角治ってきたのに三月二十四日にまたアキレス腱を少し傷めたのでエントリーから外しました。

というわけで、昨年の十一月よりも選手層が薄くなった状態でこの大会を迎えなければなりません。もちろん、五ヶ月間嘆き続けていたわけではなく、残った選手たちをいかにうまく起用して戦うか、ありったけの知恵を絞って組み立て直しをしてきました。春休みから練習に参加してくれた新入生たちも戦力に組み込まなければならぬので試合形式の練習を中心に間に合わせ作業を進めているところです。

どんな戦いをしてくれるかイメージが湧きませんが、六月の高校総体で浜本をコートに戻した時にどうなるかをしっかり見極める大会にしたいと思います。本当ならもっと早くこの案内文書を出すはずでしたが、ケガ人や病人の復調具合を観察したり、新入生の力量を見極めなどに時間がかかったりしてエントリーがなかなか決められずに遅くなってしまいました。

【結果報告】

初日

磯野は大会前々日に捻挫しましたが、腫れていようが痛かろうが試合には出すつもりでした。大会直前にケガをするケースがあまりにも多いので腹が立つたからです。でも、今朝バスに乗り込む時の様子を見て初日は出すのをやめました。上田と小田が体調不良とケガでエントリーから外れたので、浜本と影井を実戦でのリハビリという意味で急遽大会前日にエントリーしました。風邪が治っていない川畑は息づかいを観察しながら早めの交替で繋ぎました。神経を使いますよ今年のチームは。

二日目

選手の今のレベルの眼力でも、相手をよく見れば「この勝負は貰ったぞ」とわかる場面がたくさん見つかるはずなのに、そう思っただけでプレイしている気配が伝わってきません。だから試合が重たくなるんです。困った時は私が知恵を絞り出すから選手は自分の感性を大事にして戦って欲しい。そんなことを強く感じた一日でした。

最終日

昨日、影井がまた少しアキレス腱を傷め、川畑が足の甲の疲労骨折部分を再び傷めて今日はベンチ。勝負を意識した試合では浜本と影井は使わないつもりでしたから、この二人は今日の出番はもともとなかったんですが、川畑を出せないのではもうコマがありません。

スタメンで生き残っているのは（と言っても満身創痍状態ですが）と松本だけ。その二人も性格的に「俺についてこい！」というタイプではなく、仲間が揃ったらホッと安心して自分らしさを出せるタイプ。ですから今日の試合は私がどんな音色で笛を吹いても踊ってくれませんでした。

明日から浜本を投入して高校総体を睨んだ練習が始まります。一ヶ月と少ししかありません。もう、痛がるのが辛かるのが選手に同情している余裕はありません。いきます！

【戦評】

この大会はいつも、中学生の目玉選手がどこへ進学し、どれくらい活躍しそうかが気になる。長崎商業の選手は機動力のある選手が揃っているようだ。長崎西にはサイズのデカイ選手が集まっているようだ。鶴鳴は頭数は集まったがみんな小さい。これをどう鍛えるか：難しそうだ。

チームの比較としては、これまでの四強に加えて清峰が力をつけてきたので五強（二強＋三中強かな？）の争いになりそうだが今のところ長崎西が抜きん出ている。長崎商業がその背後を追いかけていて、他の三チームが少し離れて行っているという状態である。

この五強を崩せそうなチームは今回見当たらなかったが、問題はこの五強が夏までにどれだけ伸びるかである。できれば九州を制して全国のトップチームに名を連ねるつもりで各チームが戦って欲しいと思う。

文責 山崎 純男

【福岡遠征】於 九州女子

○四月二十九日～三〇日 対戦チーム 九州女子のみ

試合数 一〇本（二〇分×一〇）三勝七敗

出場時間 浜本一四六分・磯野二〇〇分・影井〇分・森五八分

川瀬一七八分・松本一九八分・松木〇分・川畑〇分

山口一九〇分・吉谷〇分・小佐々 三〇分

コメント

この二日間は浜本を投入しての初遠征だった。みんなビクビクドキしながらの試合だった。二十九日の午後、ようやく浜本が本領を発揮し始めた。みんなに安心感が広がった。三〇日の午前もそれは続いた。しかし午後はバテてダメだった。でも明るい兆しが見えた遠征だった。

四月三〇日のブログより

昨日と今日、九州女子高校に胸を借りるために県外遠征をしました。浜本を本格的に投入しての一年ぶりの遠征です。二日とも日帰りでした。泊まりにしなかつた理由は、初日の出来次第で相手の九州女子高校に迷惑をかけるようなら二日目をキャンセルして学校で練習することになるかもしれない思ったからです。

初日の午前中はメロメロでした。ところが午後は浜本が落ち着いてきて午前とは別のチームみたいに動きが滑らかになりました。それが今日の午前中まで続きました。しかし、午後になるとバツタリ。浜本・磯野・松本・山口。川瀬のスタメンにバックアップが森しかいない（連れていったのは全員で二四人なんです）という状況でこの二日間をつないだのですからバテるのは当然です。

最後はそんな結果になりましたが私は大満足です。加えて試合の内容以外に心を打たれた事があります。それは帰りのマイクロパスの中での出来事です。みんな疲れてぐっすり寝込んでいる中でリヤミラーで見ると浜本だけが真っ直ぐ前を見ていて寝ていないのです。「なぜ寝ないの」と聞くと「眠くありませんから」というそっけない返事が返ってきました。「今日の試合の事が頭の中をグルグル回ってるんだろ」と言ったら浜本は「ハイ」と答えました。筋肉痛と疲れで心身共にポロポロのはずなのに頭はカーッと冴えていて眠れないのです。そんな浜本の胸中を想像しながら、私は自分の中の奥深くいところからグーツと私自身を突き上げてくる強い決意を覚えました。

【倉敷遠征】於 倉敷体育館

○五月〇三日～〇六日 対戦チーム

熊本慶誠・倉敷翠松・徳島城北・夙川学院・宇部慶進

福井商業・九州女子のみ

試合数 十四本(二〇分×十四) 八勝六敗

出場時間 浜本一三一分・磯野二二一分・影井〇分・川畑〇分

川瀬二〇二分・松本二七分・松木〇分

山口二〇分・森一九四分・吉谷十一分

川口八一分・上村三九分・一瀬二二分・仲野十九分

小佐々三四分

コメント

五月三日のブログより

今日は二〇分のスクリメージを五本。浜本のプレイングタイムは九分十一分一〇分八分五分(しか出せなかったのではなく、もっと出せたけど控えさせました)。本来のスタメンは、浜本・磯野・(三年)・松本・松木・川畑(二年)。それをバックアップする主力選手は、影井(三年)・山口・森(二年)・川瀬(三年)の四人です。今回は影井・松木(鎖骨骨折後の治療)・川畑のケガで浜本・磯野・松本・山口・森・川瀬の六人しか使えません。でも、本来スタメンではなかった山口・森・川瀬が充分働いています。助かります。

五月四日のブログより

今日は二〇分のスクリメージを三本やりました。浜本のプレイングタイムは六分一〇分八分。昨日より少ないです。それは、浜本の状態が悪くなったからではなく、復調したと判断して焦らなくていいと思っただけです。この合宿で松本がしっかり役目を果たすようになり、山口・森・川瀬が影井・松木・川畑不在の穴を埋めておつりがくる働きをしてくれるようになりました。

五月六日のブログより

午前中で倉敷遠征終了。ケガなく、しかも大きな収穫を得られてホッとしています。大きな収穫のもっとも大きな要因は浜本の復活です。私には、彼女の身体から後光が差しているようにさえ見えます。この一年彼女がリハビリに取り組む姿をじっと見続けてきた私にしか見えない後光だとは思いますが…。

もう一つの要因はこの遠征で毎回名前を挙げられる山口・森・川瀬の飛躍的な成長です。六月の高校総体における彼女等の地位は不動でしょう。影井・松木・川畑とてケガが治ったとしても簡単にひっくり返すことはできないと思います。しかし森は、昨夜三九度の発熱で救急病院にお世話になり今日は静養でした。森の身体は急に自分の身に降って湧いた大役の重圧で悲鳴をあげたのだと思います。明日から三日間。浜本・磯野・川瀬・松本・山口・森の六人はオフです。

【第二回バルーンカップ】於 佐賀北高校体育館 二位

○五月十二日～十三日 対戦チーム 佐賀北(七八対七〇) 鶴崎(九八対四七)

大津(七五対六五) 小林(六二体七六)

出場時間 浜本九五分・磯野一三一分・影井〇分・川瀬七六分

上村三六分・松本一三七分・松木〇分・川畑〇分

山口一三一分・森一四四分・吉谷〇分・川口十六分

小佐々十三分・一瀬十一分・仲野一〇分

コメント

初日

浜本は先週の倉敷遠征ですっかり落ち着きを取り戻しました。彼女のACLはしっかり繋がっているのですが、リハビリ中からずっと手術した方の膝の外側に痛みがあります。でもそれは、いわゆる使いすぎ症候群による痛みなので仕方がないことです。あれだけの大ケガをして一年間棒に振り、ここまでやれるまでに回復したのですからそれくらいヨシとしなければなりません。だからといって無謀な使い方はしませんが、この日の出来は倉敷遠征に比べたらダメでした。どの選手も目に輝きがないのです。たぶん、浜本が復活

してどれくらいやれるんだろうかと心配しながら臨んだ倉敷遠征がなかなかの出来だったのでみんなホツとして気が緩んだのだと思います。浜本自身も二試合目は動きにメリハリがなく、一年ぶりに私からどなりつけられました。もう二度とケガはさせたくないと思って引っ込みました。

二日目

緩んだ気持ちというのは簡単に戻らないものです。この日も前日と同じでした。決勝戦では浜本一人が厳しい表情でプレイしています。後半、ようやく松本と山口が本来の顔つきに戻ってきたものの時既に遅し、磯野・川瀬・森は巻き返してできないまま終わってしまいました。

倉敷遠征の時と違うのは「みんなで作品を創り上げるんだ」という気持ちの希薄だったということです。でも、気が緩むところなるということを高校総体直前ではなく、この時期に味わったのはいいことだと思います。

決勝戦。浜本は復帰して初めてフルタイム出場。大事をとって休ませてばかりいると、本当に困った時に自力で乗り切るという経験をしないうまま高校総体を迎えることになると思っただけです。息が荒くなっているのはわかっていますが敢えて引っ込みませんでした。浜本は今週オフ。オーバーホールです。

【招待合宿】於 鶴鳴

○五月二六日～二七日

対戦チーム

神村学園のみ

試合数 七本(二〇分×七)七勝〇敗

出場時間 浜本六六分・磯野一九分・影井〇分・川瀬八八分

上村〇分・松本九四分・松木〇分・山口一三四分

森一三六分・川畑〇分・吉谷一〇分・川口四〇分

小佐々十三分

コメント

初日のスクリーンマジ三本、浜本の出場時間はゼロ。二日目の四本は様子を見ながら使った。最後の二本は二〇分まるまる出場させた。痛がるうが腫れていようが、あと一〇日後に開催される県高校総体に出場しなければ何のためにこの一年間リハビリを続けてきたのかわからないから、浜本もその気ではないはずだ。こちらが浜本の決意に添えてやらなければならない。

平成十九年〇六月

県高校総体

二位 スタメン

浜本

磯野

松本

山口

森

【案内文書】

今シーズンのスタメンは、浜本 磯野 影井 松本 松木 になるはずでした。それがなかなか揃わず、ひどい時には松本一人しかコートに居ない(昨年十一月の新人戦)という時もありました。今大会も、本来ならば主力ローテーションに加わるはずの影井・松木・川畑のケガの回復が長引き、スタメンは浜本・磯野・松本・山口 森 で行くことになりました。

が、浜本が一年ぶりに復帰し、山口・森が四月下旬から五月上旬の遠征で力をつけ、これまでまったく戦力としては計算していなかった上村までが主力組に食い込んできたので憂いはありません。

今大会を迎えるに当たって私の臉に焼き付いて離れないのは四月三〇日の浜本の表情です。浜本復帰後初めての遠征最終日の帰りの車中で、リアミラーを通してチラッチラッと見える浜本の目は、まっすぐ前を見ていて、空中に映し出された自分しか見えない映像を何度も何度も見ているように見えました。

長かった一年間のリハビリの日々を思い出し、この二日間のプレイを振り返り、来るゴールデンウィーク遠征のイメージを練り上げ、一ヶ月後の高校総体に向けての決意を固めていたのでしょうか。

HPでも述べましたが「なぜ寝ないの?」と聞いたら「眠くありませんから」と、そっけない返事が返ってきました。普通、遠征帰りのバスの中では出発後五分も経たないうちに疲れてみんな寝てしまいます。浜

本の頭の中では、自分が疲れていることすら気付かないほど様々な思いが走馬燈のように駆け巡っていたでしょう。

私の著書「続・チームを創る十五頁」で述べていますが、昭和六一年、横尾中学校出身の新人生月川のことについて、「中学時代のライバルがそれぞれ他の高校でやっている。そしてやはり、そのライバルたちも一年生ながらスタメンで試合に出るだろう。月川をその連中に負けさせたくないんだ。鶴鳴に行った月川が一番伸びたねと、バスケット関係者に言わせたい。みんな力を貸してくれ」と上級生を含めた選手全員に頼んだことがあります。

今年も昭和六一年の月川同様、残りの選手全員に「浜本のこの目に悲しみの涙を溢れさせたくない。みんな力を貸してくれ」と頼みたいと思います。私は浜本だけを寵愛してこのようなことをチームメイトに頼むわけではありません。誰かのために何かをしてやるうという気持ち、その原点は人間愛です。それが根底にあつてチームワークが生まれ、最終的にはその人間愛がチーム力を生み出すと思うのです。

浜本が大エースでしかも一年のブランクがあつたので「浜本のために」という名前が登場しましたが、悔しい思いをしているのは影井も松木も川畑も同じです。残る選手たちが「あなたたちを悲しませたりはしないよ」という気持ちで臨めば「自分にこんな力が潜んでいるとは思わなかつた」という力が湧き出てくると思います。

【結果報告】

初日

長い長い一年でした。第三ピリオドが終わつたところで浜本に「せっかくテーピングしたんだからもうちよつと出たいと思つているだろ?」と聞いたら即座に「はい」という返事が返ってきました。で、あと一〇分出してやりました。

二日目

森と山口の目が主力選手らしい目つきになってきました。特に森は、四月の春季戦でも月末の福岡遠征でも戦力として期待はしていなかったのですが、最近少し自信を付け、この大会に入つてからは目に落ち着きが出てきました。たぶんチーム全体に安心という空気が広がってきたからだと思います。

三日目

「底が浅い」。長崎西戦でそう思いました。浜本が復帰して「さあ揃つたぞ」という気分になつただけであつて、揃つてからチームをたたき上げていないという脆さが出てしまいました。浜本をまた壊してしまふのが怖くて腫れ物にさわるような練習をしてきて、それで決勝リーグを乗り切ろうなんて、神様に叱られますよね。

長崎西戦が終わつたあと、涙を一生懸命堪えて体育館から引き上げようとしている浜本に「応援団の方々に挨拶するのを忘れているだろ。そんなことじゃ本当の大物にはなれないぞ」と、また追い打ちをかけた。負けた責任を選手に負わせる気は毛頭ありません。強く逞しい人間になつて欲しいからこそその追い打ちです。もちろん私は九月のウィンターカップ予選に向けての構想をすぐ練ります。今回は選手たちの目に嬉し涙を溢れさせてやるために…

追伸 明日の結果がどうなるうと、鶴鳴が一位になる目はなく、二位〜四位の目しかありません。

最終日

優勝できなかった大会は過去何度もあります。今回、それがまた一つ増えましたが気持ちの中にわだかまりは残っていません。よくここまで立ち直つたと思つてやりたいです。この一年親身になつて面倒を見てくださつた榎林医院の院長および、米倉先生、宮本先生、PTの中尾先生本当にありがとございました。九月のウィンターカップ予選で恩返しができるようがんばります。

【戦評】 長崎西戦

鶴鳴は浜本が復帰し、安定したバスケットをするようになっていた。長崎西は昨年インターハイとウィン

ターカップに出場した自負心が全員から発散していた。

滑り出しは好ゲームだった。が、第二ピリオドに六番手で出てきた玉村がパスカットして速攻を決めてからゲームの様相が変わった。それ以後ずっと長崎西がずっと主導権を握って試合を進めた。試合を決めたのは玉村のパスカット、玉村のスリーポイント、玉村の右ドライブイン、玉村の左ドライブイン、笹嶋の左サイドからのジャンプショットだったと思う。

特に笹嶋のジャンプショットは攻め手に窮して何度もドリブルチェンジしてからの一対一だっただけに、鶴鳴としてはダメージが大きかった。第一ピリオド、鶴鳴は非常に読みの深いチームディフェンスをしていただけに、この四本の単純な一対一でゲームを落としたのは悔やまれる。

後半、長崎西のゾーンに対して鶴鳴のスリーポイントはことごとく外れ（二九分の一〇三・四％）で万策尽きた感があったが、これもすべて第二ピリオドのディフェンスが発端だと思われる。

純心戦

純心は青田と内野の両一年生をスタメンに加えて機動力が増し、好不調の並が激しかった坪田が精神的に崩れることなく安定した試合運びをするようになって四月の春季選手権とはまるで違うチームになっていった。鶴鳴は、浜本が復帰して本来の姿に戻ったかに見えたが、日頃のトレーニンング不足は否めない。加えて決勝リーグの初戦で長崎西に敗れた精神的ダメージは大きく、滑り出しは鉛のように重い動きで純心に好きなように攻められていた。

そういう状況の中で、森だけは目に光りが残っており、鶴鳴は彼女の攻撃でなんとか食いつないでいく。そして第二ピリオド終盤、速攻とスリーポイントで立て続けに鶴鳴が追いついてからは「これをやられたら再逆転か」という場面で、森以外の選手がシュートに、リバウンドに、ディフェンスに粘りを見せ、対に再逆転はさせなかった。

後半は、膝を傷めていない方の太もものけいれんで出たり入ったりしたりの浜本が、身体はボロボロになりながら勝利決定のシュートを決めて幕を下ろした。二度とやり直しの効かない高校総体の試合は、「青春」ということばを用いて語られることが多いが、コート上には青春ということばでは語れない過酷さがある。

長崎商業戦

第一ピリオド、長崎商業のローリングから相手を外して一対一の勝負を狙うオフェンスに鶴鳴は振り回され、後手後手に回っていた。第二ピリオドからは鶴鳴が遅れずについていけるようになり、点差は一点二点の差で長崎商業がリードしているものそれ以上は離れない。

その間の体力の消耗のツケが後半開始早々長崎商業に回ってきた。第三ピリオドはわずかに四点しか取れない。鶴鳴とてその間快調なオフェンスをしているわけではなく、なかなか試合の主導権は取れない。が、動きだけでは相手を振り切れない長崎商業のオフェンスでは試合をものにできなかった。

勝負とはまったく違った視点から印象に残ったのは長崎商業の主将川上と鶴鳴の主将浜本の姿であった。二人は昨年のこの大会で同じ日にACLを切った。手術もリハビリも同じような経過を辿った。復帰は川上が少し早くて三月下旬だった。浜本はそれに約一ヶ月遅れて（というより私が遅らせた）四月下旬だった。

しかし川上は復帰直後の遠征で再びACLを切った。三回目の受傷だ。手術すれば高校総体にはもう間に合わない。装具装着で試合に出た。鶴鳴戦では七分間出場した。残り三秒、エンドラインからスローインされたボールをドリブルで運んできた川上はハーフラインを越えず超ロングシュートを放った。私は思わず「入れ！」と叫んだ。

文責 山崎 純男

6月5日のブログより

高校総体が終わりました。他人事ですが、長崎西男子の無念さと長崎商業女子主将の川上の無念さが痛いほどわかります。バスケットの女子選手にはあまりにも膝のケガが多すぎます。医科学委員会をお願いしてケガを食い止めるための医科学サポートを企画しようと思います。

様々なサイトがありますが、岡田瞳さんのサイト <http://hitomi-trainer.hp.infoseek.co.jp/>、小笠原一生さんのサイト <http://www.oga-acl.com/index.htm> はとても参考にになります。

平成十九年〇六月 九州高校総体 一回戦 スタメン 浜本 磯野 松本 山口 森

【案内文書】

県高校総体が終わった直後から私の頭はウィンターカップ予選モードです。それは、九州総体を軽く見ているという意味ではありません。九州総体はウィンターカップ予選の戦いぶりを占うための重要な試合になります。ですから、私はエンジン全開で県高校総体後の初練習（七日）に臨みました。浜本と磯野も私と同じテンションでした。

ところが下級生は練習を流しているだけでした。たとえば彼女らが怠け者みたいに聞こえますが本人たちは意図的に手を抜いていたわけではありません。一仕事終えたあとの放心がまだ残っていたのです。私は下級生の中でもチームを担っている松本・森・山口を私の目の前に並べ、「これが浜本や磯野とお前らとの人間の差じゃーっ」と、怒鳴りつけました。

このような精神面のたくましさも含めて、技術的にも体力的にも「したたかになったなあ」というチームに、あと三ヶ月で仕立てなければなりません。特に技術的には、県高校総体の長崎西戦で露見した個人ディフェンスの脆さを直さなければなりません。この九州大会ではそこが焦点です。「え？ たった一〇日間でディフェンスを立て直せるの？」なんてこと言ったら三ヶ月経っても立て直せません。九州総体では一人も穴のないチームディフェンスができることを目指します。

もう一つ課題があります。それは浜本の膝です。これまで、県高校総体に出場するために炎症が起きてもステロイドで抑えて練習してきましたが、これからは理学療法とトレーニングだけで治し、ステロイド不要でウィンターカップ予選に臨ませたいと思っています。しかし、コントロールが難しいです。チームとしての公式戦は九州大会しかありませんが、県代表としてはブロック国体がありますし、夏休みには遠征合宿や招待合宿がありますから、治療のために休養させた方がいいが浜本を出さなければ試合にならないし合宿の意味がない。「さあどうする？」と決断を迫られる場面がしばしば出てくると思います。でもその場になって見なければ分からないことですから深くは考えないで、その場その場で対応していこうと思います。

【結果報告】

負けた原因は、浜本と他の四人の歯車が最後まで噛み合わなかったという一言に尽きます。私はそれを次のように分析しています。

長いリハビリを経て復帰した浜本は、この九州大会で「もう大丈夫だ」と思って相手を力づくでねじ伏せようとして力んでしまった。一方他の四人は受傷以前の浜本が戻ってきたことに安心して浜本に任せっぱなしになってしまった。双方気がついた時にはすでに遅く、双方の思いが一線上に揃うことはなかった。

「組織を動かすというのは難しい」あらためてそう感じた大会でした。もっとも甘かったのが、「浜本と他の選手は別メニューでも、試合前に合流すれば間に合う」と思っていた私の考えです。組織力というのはそこに所属する者が共に暮らしながらお互いの長所短所を受け入れ、長い時間をかけて熟成させていかなければ育たないものだということもあらためて感じました。たぶんこのことは、過去に何度も気付いたことがあるはずですが、人というのは愚かなもので、こうしてヤケドをしないと思い出さないのですね。

次に、これは私の考えが甘かったというのではないのですが、選手に人間的な成長をどうやって促すかという課題が依然として残っています。九州総体は県総体後の放心からなかなか元に戻れない下級生に苛立ちを覚えながら迎えた大会でしたし、試合前のアップからも緊迫感が伝わってこないことに怒りを覚えながら試合が始まってしまいました。試合直前でしたから表情には出しませんでしたか…

このようなことをなくすには、適切な事例を挙げ、わかりやすいことばでそれを伝え、選手の感性を高めていく方法以外に、今のところ私の頭で思いつくことがありません。根気が要りますがいろいろんな手だてを考

えながら、自分たちが主導権を握っていない時間帯もしたたかにゲームを繋いでいく人間に育てていきたいと思えます。

【戦評】

重たい試合だった。鹿児島純心は、持ち味の走るバスケットが出たのは最後の五分ぐらい。鶴鳴は最後まで軽快なパッシングからオフENSEを組み立てるバスケットができないまま終わった。

鹿児島純心が重かった理由はわからない。鶴鳴が重かったのは主砲浜本と他の四人が噛み合わなかったのが最大の理由だと思われる。鶴鳴は全員のムービングの中で浜本が一对一をやればよいのに浜本がボールを持ちすぎる。他の四人は浜本にパスしたあとは浜本に任せっ放して立ち止まったままでいる。この繰り返しだった。どちらもそのことに気付いてはいるのだが、浜本が思った時に他の四人が思っていない。他の四人が思った時は浜本が思っていないと、終始すれ違っていた。

文責 山崎 純男

【招待試合】於 鶴鳴

○九月〇九日

対戦チーム

佐賀清和のみ

試合数 六本(二〇分×五、一〇分×一)三勝三敗

出場時間 浜本七二分・磯野八三分・上村十四分・川瀬二一分

山口六一分・森五九分・松本八一分・**松本五九分**

川畑五二分・川口二二分・小田〇四分

コメント

三月下旬に鎖骨を骨折してから五ヶ月以上戦列から離れていた松木がこの練習試合からメンバー表に載った。これで当初のスタメン構想である浜本・磯野・影井・松木・松本のうち一人がようやく戻ってきたが影井はまだ戻らない。相変わらずエンジン一機故障のままの飛行だ。

【遠征試合】於 慶誠

○九月十五日

対戦チーム

慶誠のみ

試合数 五本(二〇分×五)五勝〇敗

出場時間 浜本六七分・磯野六八分・上村十二分・川瀬二一分

山口四九分・森五六分・松本六七分・松木四四分

川畑五〇分・川口三〇分・吉谷十六分・小田十六分

小佐々〇四分

【遠征試合】於 神村学園・川内高校

○九月十六日～十七日

対戦チーム

神村学園・川内高校

試合数 六本(二〇分×六)六勝〇敗

出場時間 浜本八七分・磯野七二分・影井二九分・川瀬三六分

上村五二分・松本九〇分・川畑七〇分・松木〇分

山口七三分・吉谷四三分・森〇分・川口四八分

松木の〇分と森の〇分は何だったのだろうか？

コメント

八月十七日(金)に「出来る練習から参加します」と言って復帰してきたケガ人も、まだ復帰する気配も見せないケガ人もすべて出勤命令！痛みが残っているようがトラウマが張り付いているようが無言を言わず練習に参加させ、以後ずっとやらせています。下級生は何が起きようがもう一度やり直すことが出来ますが三年生にとっては待たなしの大会なんです。三年生の気持ちを考えれば下級生は痛いとか不安だとか言ってもらえませんか。

一肌脱ぐといつことばがありますが、そんなやさしいことばではなく、下級生はまさに三年生に命を捧げるといつ気持ちでこの大会に臨まなければならぬでしょう。今年の三年生は二年連続インターハイ出場を逃したといつだけでなく、ケガ以外にも様々なストレスや事件に見舞われて苦難続きの二年間でした。そんな彼女たちに最後の花道を作つてあげるのは下級生の責務です。それは私が強要するものではなく、下級生の心の底から湧き上がってくるべきものです。その思いがどの程度のものかは結果が示すことになると思います。

以上、九月三日付けのウインターカップ予選案内文書（後述）より抜粋

こうして、主力選手が揃ったものの全員そろつて練習したのが約三週間あまり。九月上旬になつてもケガした時のトラウマからなかなか抜け出せない選手もいて練習は成立しているものの中身が伴いません。しかも実戦不足。そこで九月九日・十五日・十六日・十七日と練習試合を積み上げました。万全とは言えませんが、ともあれ披露宴に出す食材はすべて揃いました。あとは私の味付け次第です。 文責 山崎 純男

平成十九年〇九月ウインターカップ予選 三位 スタメン 浜本 磯野 松本 松木 森

【案内文書】

六月中旬に再度傷めた浜本の膝は、一瞬膝が深曲げ状態になり、そこにグツと体重がかかったので痛かつただけでした。その後浜本は少し休ませましたが、七月中旬から国体チームの練習が始まり、下旬にはインターハイ参加チームの合宿（佐賀県の唐津で開催）受け入れ、八月には招待合宿や国体チームの遠征と、浜本をゆっくり休ませる暇がありませんでした。ですから、鶴鳴単独での練習の時は浜本を休養させ、他の選手のレベルアップを図りました。

ところが、三月下旬に骨折した松木の鎖骨がなかなかつながらず、八月中旬になつてもチーム練習に合流できません。さらに八月上旬に森が右肘内側副靭帯を損傷。相前後して川畑が練習中にルーズボールを追っかけていてボールに乗つて転倒し、膝の急激な過伸展による大腿骨下腿骨両面の骨挫傷で二人とも戦線離脱。というわけで夏休みの強化練習は主力選手がほとんど抜けた上に毎日一〇人前後しかコートに居らず、これでは午前午後の二部練習をしても志気が上がらないので夏休み中旬までは午前中だけの練習に切り替えました。

八月十七日（金）に、「出来る練習から参加します」と言つて復帰してきたケガ人も、まだ復帰する気配も見せないケガ人もすべて出勤命令！ 痛みが残つていようがトラウマが張り付いていようが無言を言わず練習に参加させ、以後ずっとやらせています。下級生は何が起きようがもう一度やり直すことが出来ませんが三年生にとっては待ったなしの大会なんです。三年生の気持ちを考えれば下級生は痛いとか不安だとか言つてられません。

一肌脱ぐといつことばがありますが、そんなやさしいことばではなく、下級生はまさに三年生に命を捧げるといつ気持ちでこの大会に臨まなければならぬでしょう。今年の三年生は二年連続インターハイ出場を逃したといつだけでなく、ケガ以外にも様々なストレスや事件に見舞われて苦難続きの二年間でした。そんな彼女たちに最後の花道を作つてあげるのは下級生の責務です。それは私が強要するものではなく、下級生の心の底から湧き上がってくるべきものです。その思いがどの程度のものかは結果が示すことになると思います。

備考 影井（鳥取鹿野中一七七cm）は、アキレス腱の具合が良くならないのでリタイアさせ、学業に専念させています。

【結果報告】

初日

オープンスクールで部活動体験が組まれていたのでどうしても選手全員を試合会場に連れて行くことができず、マネージャーの森と影井・木村・小佐々・植木・小田・一瀬の八人は学校に残つてオープンスクールの手伝いをしてもらいました。

この二年間、選手の誰かがケガの治療が長引いて試合に出られなかったり、大会直前にケガをして試合に出られなかったり、試合前夜に高熱が出て会場にすら姿を見せることができなかつたりなど、ひっきりなしにそんなことが続きました。今日は、試合内容がどうのこうのというよりも、主力選手が全員揃ってユニフォームを来てコートに登場してくれた喜びを噛みしめました。

最終日

後半重くなるのは分かっていたので、こちらに主導権があっても浜本や松本や松木や森を頻繁に短時間ベッチに下げ、致命的な失速を抑えながら最後の勝負所まで凌ごうとしましたが効き目がありませんでした。重くなるだろうと思っただ理由は次の三つです。

猛暑の中でのゲームだということ。

主力選手が全員復帰したといっても揃って練習できたのが八月後半からの約一ヶ月しかなかったこと。

小さな事件に翻弄され、それが尾を引く選手がまだまだ多いということ。

メンバーが揃ったというだけで、それに続く鍛錬を積み重ねていないチームに勝利を恵んでくださるほど神様は寛大ではありませんでした。これで二年連続全国大会の舞台は踏めずに平成十九年のシーズンが終わりましたが、何が起ころうと平成二六年の長崎国体までは日本の頂点を目指すチーム創りを継続します。

【戦評】

審判研修の講師で福岡から来られた榎原章三先生（元国際公認）が自ら買って出てこの試合の審判をしてくださった。光栄であった。試合は滑り出し鶴鳴好調。純心はなかなか主導権が取れないが、ドライブを主とした攻撃で食い下がって点差は開かない。

前半終了間際、純心の最後のシュートが外れて前半互角で終わりかと思われたが、オフェンスリバウンドに飛び込まれてシュートをねじ込まれ、鶴鳴三点ビハインド（三八対三五）で前半終了。

後半、予測していたとはいえ、鶴鳴の動きがパタッと止まって散発の個人攻撃でしか攻めることができな。一方純心は藤井・坪田・内野が伸び伸びプレイし、シュートも小気味よく決まる。第三ピリオドだけの得点は十七対一〇。このピリオドで勝負の大勢が決まった。

決勝戦は純心の動きが準決勝とは別人のように重く、一方長崎商業はスピードもシュート確率も圧倒的に勝り前半で決着が着いた。山崎寿郎コーチ就任二〇年目。初の全国大会出場。おめでと。文責 山崎純男

三 関西ATフォーラム

夏休みも残り少なくなってきた頃、武庫川女子大学の小柳好生先生から電話がかかってきた。用件は十一月下旬に関西で行うアスレティックフォーラムにおいて、「下肢のスポーツ傷害を予防するためのトレーニング」というテーマで自分の体験なり発表をしてみたい、その後それをテーマにしたパネルディスカッションに参加してほしいというものだった。

私は小柳先生とは面識がない。どのような経緯で私に辿り着いたのかと聞くと、実は大阪体育大学の中大路哲先生に「アスレティックフォーラムで現場サイドから発表して貰えるような人を知らないか」と相談したところ即座に私を紹介されたということだった。

私でよければということ引き受けはしたがこれが大変だった。私はスポーツ医学についてはかなり長い間勉強し、鶴鳴の選手のケガの実態については克明な記録を残しているし、長崎県下のスポーツ現場における傷害の実態や意識調査をしてそれをまとめ、どこかでそれを発表してくれと言われればサッと出せる資料は持っている。しかしそれは、スポーツ現場で医学的知識が乏しいために困っている人たちに役立てるものである。

ところがこのフォーラムには、基調講演にスポーツ医学会の重鎮福林徹先生が呼ばれているし、教育講演では大阪大学病院整形外科新進気鋭の医師である中田研先生が呼ばれている。その中に割って入って何か発

表しるというのだ。敷居が高すぎる。私がどんなに背伸びをしても医学系の人々に医学的なことを講義するのは無意味だと思ったので「現場はこんなことで悩んでいますよ」「現場は医師に対してこう思っていますよ」ということを前面に押し出して話しをした。これが受けた。

閉会后、関西のみならず中国・四国・九州から集まったATたちから名刺交換、質問、意見交換攻めに会い、懇親会ではビールを飲む暇も食べ物をお口にする暇もなかった。医師にしるATにしる、研究者たちは自分たちの研究が現場に役に立っているのか、現場からどう思われているのかとても気にしているのだ。

私はこのフォーラムで発表するまでは緊張していたが、フォーラムが終わったあとでこのフォーラムに参加して本当によかったと思った。そして、私がスポーツ現場と関わり続ける間は、研究者と現場の橋渡し役をなんとかしてでも続けていこうとあらためて思った。

関西ATフォーラム開催要項

趣旨 日本体育協会公認アスレティックトレーナーとアスリートをサポートする専門家の、より一層の資質向上と連帯感を深めるとともに組織的活動による指導体制づくりを推進し、もって全国のスポーツ振興に寄与することを目的として開催する。

テーマ スポーツ傷害予防のためのトレーニング

主催 財団法人日本体育協会 公認アスレティック トレーナー関西連絡会

共催 財団法人日本体育協会 公認アスレティック トレーナー兵庫県協議会

武庫川女子大学コンディショニング研究部

後援 財団法人兵庫県体育協会

兵庫県スポーツ指導者競技会

西宮市教育委員会

西宮市体育協会

参加者 JASAA AT

一般（医師、理学療法士、柔道整復師、鍼灸・あんまマッサージ師、健康運動実践指導士）

JASAA公認スポーツ指導者

ATを目指す学生トレーナー

期日 二〇〇七年十一月二三日（祭）

会場 武庫川女子大学 マルチメディア館

備考 JASAA公認スポーツ指導者の義務研修となります。受講証明書を発行いたします。

日程 一〇時〇〇分 開会

一〇時十五分 基調講演 下肢外傷のバイオメカニクスと予防のトレーニング

福林 徹 先生 早稲田大学スポーツ科学学術院教授

十一時三五分 パネルディスカッション「下肢のスポーツ傷害を予防するためのトレーニング」

パネリスト 小笠原一生先生 国立スポーツ科学センター研究員

山崎純男 先生 鶴鳴学園長崎女子短期大学幼児教育学科教授

長崎女子高校バスケットボール部監督

十五時一〇分 教育講演 半月板の修復、再建と再生

中田 研 先生 大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学（整形外科）

十七時〇〇分 閉会

浜本は卒業後、地元熊本の実業団チームでプレイすることになった。実は、彼女が二年生の時にすでに関東の実業団から打診があった。その後彼女がACLを切ってしまったので進路の話は具体的に切り出さないうままシーズンを終えた。

ACLを切ってブランクはあったものの復帰して活躍している選手はNBAをはじめ国内にもたくさん居る。浜本もまた、二年生から三年生にかけて一年間のブランクはあったものの、卒業後はどこでもやれる力を持っていると私は思っていたので浜本に聞いた。

「お前、卒業後はどうするつもりだ？お前ならどこでもOKだぞ」

「熊本に帰って地元の実業団でプレイしたいです」

「え？WJBLも大学も、どこでも大丈夫なのに…本気か？」

「ハイ」

私は彼女の表情に陰りがなかったので、彼女は本当にそう望んでいるのだと思ってすぐ熊本のT社のKコイチに電話をかけた。

「鶴鳴の山崎です」

「ハイ、こんにちわ」

「実はうちの浜本がおたくでプレイしたいと言ってるんだけど…」

「エーッ！、もう来年度の新社員のバスケット募集枠は埋まっているんですけど…」

「そうだろうな」

「でも、ちょっと待ってください。またあらためて電話します」

翌日Kコーチから電話がかかってきた。

「先生、大丈夫です。お願いします」

T社の社員募集は原則として地元からの雇用を最優先にしており、WJBLみたくに全国一区で選手募集はしない。浜本は熊本出身なのでT社の雇用条件には合っているのだが、T社からのオファーはなかった。

Kコーチの「エーッ」を私は次のように解釈している。「うちには要らないのに」ではなく、「うちに来てくれるんですか？」の「エーッ！」だったと。なぜなら浜本は誰が見てもWJBLのどこかで通用する選手だったからである。

だから私は、浜本にはT社の採用枠がないことを告げて関東の実業団の話を薦めるつもりだった。ところがKコーチから「先生、大丈夫です。お願いします」という返事が来たのだ。この話を握り潰すわけにはいかない。

浜本がT社でバスケットをやるようになって二年目に九州総合選手権大会が長崎で開催された。両親も観戦に来ていたので会場で挨拶を交わしたが、その時母親から「あと一年、先生から習わせたかったあ」と、しみじみとした口調で言われた。「あと一年」ということは単にACLを切って一年ブランクがあったのでその一年分という意味ではない。自分の娘は高校生活を満喫していないと言いたかったのだ。

浜本が関東の実業団からオファーがあることを知っていたながら熊本のT社を希望したのは、WJBLでプレイする自信がなかったからではなく、ひたすら故郷に帰りたかったからである。T社は地元からの雇用優先でチームを運営しているが、自宅から通える距離であっても選手は社員寮に住むことを原則としている。

が、浜本はT社でバスケットをするに当たって、寮に住まなくて自宅から通うわけにはいかないかと申し出てきた。そのことをKコーチに尋ねたが「選手は寮に入るようになってるので浜本だけ自宅から通うというのはダメです」とは言わなかった。

私も浜本だけ特別扱いするのはチーム運営上よくないので強く要請はしなかった。結局浜本は他の選手と共に寮で暮らすことになったが、頻繁に自宅に帰れるので鶴鳴運動部寮生活のトラウマは徐々に薄れ、はつ

らつとした浜本が蘇ってきた。

ウィンターカップ予選の案内文書で述べた「今年の三年生は二年連続インターハイ出場を逃したというだけでなく、ケガ以外にも様々なストレスや事件に見舞われて苦難続きの二年間でした」というのは全てが人間関係に由来している。特に浜本は熊本出身なので鶴鳴の運動部寮に住んでいた。その中での人間関係に相当苦しんでいたのだ。

関東の実業団に行こうが大学に進学しようが、そこでバスケットをやるならば必ず寮生活というのがついて回る。それはもう嫌だ。故郷に帰りたい。でもバスケットもやりたい。だから地元のT社であり、できれば寮からではなく自宅から通えないかということになる。浜本は寡黙で喜怒哀楽を表に出さない選手だったので周りは気付いていないかもしれないがひょっとしたら自律神経失調寸前だったかもしれない。

選手たちは、仲間が迷惑行為をしてもマナー違反をしても決して私に告げ口はしない。仲間を売りたくないからだ。だけれどもどこからかその情報は私に届き、或いは私のセンサーがキャッチして対処する。が、私に情報が入って来ず、また私のセンサーに引つかからないまま通り過ぎていく事案も毎年必ずあるはずである。コーチは技術や戦術を教えるだけでなく、選手を取り巻くこのような諸問題を漏らさずキャッチして速やかに対処する力も身につけなければならない。

アメリカではカレッジスポーツでは、学生の在学期間は五年間までとし、その在学中に四年間プレイできるということになっている。そこで大学側は今年入学してきた新入生を登録せず、その選手が二年生になった時に初めて登録してそれから四年間プレイさせるというやり方をする場合がある。まだ試合に出せる力がない一年生を登録するのはもったいないので、充分力がついてから四年間プレイさせるためだ。このような扱いをする選手をレッドシャツ新入生という名称で呼ぶ。

浜本も、それが可能ならば三年時の登録をせずに留年させて四年間在学させ、四年目に三年生として登録し、思い切りプレイさせたかった。後の祭りだが…